

人的リソースを活用した「大学院進学 of 日本語（面接）」 クラスの実践

—教師、ゲストスピーカー、受講生の役割と可能性—

鈴木 秀明 君村 千尋

要 旨

本稿では、キャリア支援日本語コースの「大学院進学 of 日本語（面接）」クラスの実践を報告する。毎回の授業は、講義、実践練習、ピア評価、教師フィードバック、自己評価の順に行った。また、講義では教師に加え、現役の大学院生をゲストスピーカーに招いた。本授業を通して受講生は教師、ゲストスピーカー、および他の受講生から多くの刺激を受け、学習意欲が向上したことが、教師の観察および受講生の自己評価からうかがえた。

【キーワード】 面接 教師 ゲストスピーカー 受講生 ピア評価

The Contribution of Teachers, Guest Speakers, and Students as Human Resources in a Japanese Course for Graduate School Interview Preparation

SUZUKI Hideaki, KIMIMURA Chihiro

[Abstract] In this paper, we will report on the practice of the "Japanese for Professional Purposes (Preparatory Japanese Course for Graduate School (Interview Preparation))" class of the Japanese for Professional Purposes Course. Each lesson proceeded in the order of lecture, conversation practice, peer assessment, teacher feedback, and self-evaluation. In addition to the teachers, active graduate students were invited as guest speakers during the lecture. Observations by teachers and self-assessment of the students revealed that the students received a lot of inspiration from teachers, guest speakers, and other students through this lesson, and their motivation for learning improved.

[Keywords] Interview, teacher, guest speaker, student, peer assessment

1. はじめに

現在、日本国内における大学院進学指導は、日本語学校や大学の留学生別科などで実施され、主に日本語教師が指導している。指導内容は、指導教員とのコンタクトの取り方、研究計画書作成、レポート作成、ゼミ発表、面接練習など多岐に渡る。さらに、受講生の専門は多様であるため、指導に携わる教師にかかる負担は非常に大きい。予備教育機関における大学院受験の面接指導に関する実践報告には、受講生および教師の声を吸い上げ、口頭表現能力向上を目的とした教材開発を報告した近藤他(2005)、近藤他(2006)、大学院受験時の口頭試問を視野に入れた授業実践の静谷(2008)、大学院進学説明会に現役の大学院生および大学院教員を招き口頭試問の受け方を報告した弓田(2009)などがある。これらは同一機関の実践報告であり、当該機関では大学院指導に携わる教員間の情報共有も積極的に行われている。

本報告では人的リソースを活用した大学院進学指導の授業実践を報告する。まず、2節で国立大学の日本語プログラムの「キャリア支援日本語コース」に新設された「大学院進学の日本語(面接)」クラスの概要を述べる(木戸他2020を参照)。次に、2節から5節で2021年春学期の授業実践について詳しく報告し、本授業に関わる人的リソース(ゲストスピーカー・教師・受講生)を活用した授業設計や各授業活動を通して得られた知見をまとめる。最後に、6節で様々な人的リソースを活用した大学院研究生に対する支援のあり方を探っていく。

2. 大学院進学の日本語(面接)クラス

2.1 クラスの概要

本クラスは、筑波大学大学院の修士課程または博士課程への進学を目指す研究生、学部生(学類生)に対する大学院入試支援を目的として、2019年秋学期に新設された科目である。CEGLOC(筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター)の「キャリア支援日本語コース」の一科目となっている。

本クラスで扱う指導内容は、大学院入試で実施される口述試験(面接)のための準備・対策である。授業では大学院入試面接の内容や面接での答え方、受験時のマナーなどについての講義を行い、研究内容を口頭で分かりやすく伝える練習を繰り返し行う。2019年秋学期は対面授業で実施されたが、2020年春学期以降は、コロナ禍のためWeb会議システムZoomを用いた遠隔授業の形態で行われている。授業時間数は1回2コマ×5週間(75分/1コマ)の合計10コマで、筆者2名がティームティーチングで担当し、現時点で4期を終了している。

2.2 対象者

2021 年春学期の受講生の属性を表 1 に示す。2021 年春学期の受講生は 10 名であった。また、受講場所は 10 名中 5 名が日本国内で、残りは海外 (母国) からであった。筑波大学には多くの研究群があることから受講生の専門分野は、人文社会科学、人間総合科学、生命地球科学、数理物質科学など、文系・理系を問わず多岐に渡っていた。さらに、受講生の日本語学習歴や日本語力も一様ではなかった。本授業の履修条件は J 4 (中級) レベル以上となっているが、授業開始時に受講生の日本語力を確認すると、日本語で作文が少し書けるレベルの中級前半から、JLPT の N 1 取得済の上級レベルまで様々な日本語レベルの受講生が参加していた。そのため、受講生一人ひとりの日本語力に対応した指導が求められた。特に、海外からの受講生は日常で日本語を用いる機会がほとんどなく、N 1 を取得していても日本語で話すことに慣れていない場合や、日本語の授業以外の時間に日本語を使用する機会がない受講生が少なくないため、大学院入試の面接試験に対して不安を抱えているようであった。

表 1 2021 年春学期の受講生の属性

受講生 ID	受講場所	研究群	専門分野	文系 / 理系
1	日本国内	人文社会科学	教育基礎科学	文系
2	日本国内	人文社会科学	人文学	文系
3	日本国内	人文社会科学	国際日本学	文系
4	海外	人間総合科学	歴史人類学	文系
5	日本国内	人間総合科学	教育学	文系
6	海外	人間総合科学	世界遺産	文系
7	海外	生命地球科学	生物資源科学	理系
8	日本国内	生命地球科学	地球科学	理系
9	海外	生命地球科学	農学	理系
10	海外	数理物質科学	電子物理工学	理系

2.3 授業の概要

2021 年春学期の授業シラバスを図 1 に示す。前述のとおり 2019 年秋学期より始まった本コースの授業は、受講生の人数、専門分野に応じてその期ごとに若干の異なりはあるものの、内容および授業方法はほぼ同じである。

大学院進学の日語（面接）A

2021年春学期

1. コースの目標

- ・大学院の入学試験（面接試験）への対応力を身に付けることを目指す。
- ・大学院志望動機、研究計画書の説明、大学院終了後の予定などを日本語で表現できるようになる。
- ・また、日本での面接の態度、マナーを学ぶ。

2. 履修条件

1 J 4 レベル以上

2 大学院の入学試験受験予定の研究生および学類生

3 全5回（10コマ）の授業にすべて参加できること（聴講は不可）

3. 授業スケジュール

回	日付	内容
1	7/2	オリエンテーション、講義（面接の目的、マナー、質問項目） 実践練習①、教師フィードバック
2	7/9	講義（現役大学院生からの話） 実践練習②（グループ練習）、教師フィードバック
3	7/16	講義（想定問答集の回答の作り方のポイント） 実践練習③、教師フィードバック
4	7/23	講義（面接での注意点） 実践練習④（模擬面接）、教師フィードバック
5	7/30	講義（奨学金・就職の面接） 実践練習⑤、教師フィードバック、コースのまとめ

4. 使用教材

講義資料（PPT） 想定質問リスト 他

5. 成績評価方法

課題・発表 60%、授業参加度 20%、毎週の振り返り（自己評価） 20%

図 1 2021年春学期の授業シラバス

2.4 授業の流れ

授業は毎回、図2のような順序で進められた。

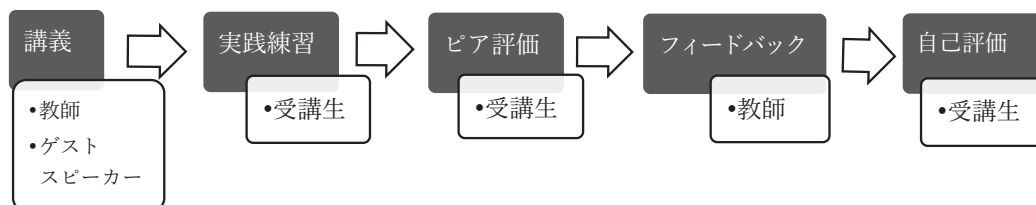


図2 1回の授業の流れ

はじめに、授業冒頭では講義が行われた。面接の目的やよく聞かれる質問とその答え方、面接時の服装やマナーに関して、教師やゲストスピーカー（ゲストスピーカーは第2週目のみ）による講義（体験談）を聞いた。

その後、講義を踏まえて実践練習を Zoom のブレイクアウトルームを使用して、2, 3名のグループに分かれて行った。グループ内で面接官役と受験生役を交替で行い、相手の受け答え方について良かった点、分かりにくかった点、改善案などを述べ合うピア評価を行った。なお、実践練習では、はじめのうちは専門分野が近い受講生でペアやグループを作り、コースの後半では、セッションごとに組み合わせを変え、様々な相手と練習ができるようにした。

実践練習の時間は、教師はブレイクアウトルームを巡回し、練習が円滑に進んでいるかを確認した。また、受講生からの質問に回答し、受講生に適宜助言を行う一方、気づいた点や共通して見られたポイントを教師間で共有した。そして、改善点を整理し、クラス全体に向けて教師フィードバックを行った。

毎回の授業の最後には、manaba（学習管理システム）のアンケート欄に設けられた自己評価シート（図3）に各自記入することを課した。アンケートの質問項目は、学習内容の理解度および有用度を4段階評価の選択式で回答させた。また、講義を通して学んだことおよび実践練習で学んだことに関しては、自由記述形式で記述させた。さらに、その日の授業での学びや実践練習を100分率で自己評価させ、次週何ができるようになりたいかなどを確認することで自らの学習を振り返った。

以上が1回の授業（75分×2コマ）の流れである。

本日の授業内容を振り返ってください。

1 学習内容の理解度(オリエンテーション、講義【面接の流れ・質問項目・マナー】、練習の進め方)

1.1

1. よく理解できた

2. 少し理解できた

3. あまり理解できなかった

4. 全然理解できなかった

2 学習内容の有用度(オリエンテーション、講義【大学院進学目的・質問項目】、練習の進め方)

1.2

1. とても役に立った

2. 少し役に立った

3. あまり役に立たなかった

4. 全然役に立たなかった

3 講義【大学院進学に求められること】を通して、何を学びましたか。具体的に書いてください。

1.3

0文字

4 実践練習【面接試験での質問項目】を通して、何を学びましたか。具体的に書いてください。

1.4

0文字

5 今日の授業の自己評価をしてください。(0~100) %の数字で記入してください。

1.5 %

図3 自己評価シート例

2.5 「人的リソース」としての教師・ゲストスピーカー・受講生

本稿における「人的リソース」とは、本授業を担当する教師、受験情報の提供や専門分野に関する助言を行うゲストスピーカー、そして受講生自身を指す。

本授業は「キャリア支援日本語コース」の一科目であるが、本科目は教師が一方向的に知識を伝え、運用力を向上させる指導では十分ではなく、受講生が主体的に授業に参加し、自身の目標達成に向けて努力を重ねることが必要である。より教育効果が高い授業内容を実現するには、教師に加えて、受講生にも指導や助言役の一端を担ってもらうことが必要であると考えた。

また、教師、ゲストスピーカー、受講生の知識と能力を授業内で適材適所に活用することは、受講生の主体性を涵養するのみならず、教師の負担を軽減し、さらに受講生の

満足度や学習意欲の向上等の利点があると考え。以下に、それぞれの役割について詳述する。

2.5.1 教師の役割

教師の役割としては、まず知識や情報の提供が挙げられる。ここでの知識や情報とは、面接試験の意義や目的、面接で頻繁に尋ねられる質問項目とその適切な答え方、受験時に必要な日本語力、態度、マナー等に関するものである。受講生が予め持っている知識や情報は、主観的であったり、不正確であったりすることが少なくない。したがって、講義によって受講生の認識のズレを修正し、調整を促す。

二つ目は、授業内外での頻回な受講生へのフィードバック（以下、教師フィードバック）が挙げられる。授業内では、前回授業の課題に対して問題点を指摘して全体で共有し、会話練習の各グループを巡回しながら良い点・改善点を述べる。一方、授業外では、毎回の授業後に提出される自己評価、質問に対して個別に回答やコメントを返す。このような授業内外における丁寧な教師フィードバックは、受講生の学習意欲を向上させ、次の授業に向けた刺激にもなっていると考える。

2.5.2 ゲストスピーカーの役割

ゲストスピーカーとは、前年度に筑波大学大学院を受験し、合格した自らの体験を受講生に伝える現役の筑波大学大学院に在籍する大学院生を指す。毎学期、コースの第2回目にこのゲストスピーカー2、3名を授業に招き、彼らの体験談をクラスで共有している。受講生にとっては先輩にあたるゲストを交えた活動は、本コース独自の授業内容といえる。この活動により、受講生は受験対策や効果的な練習方法、試験当日の様子等を本学の受験経験者から直接聞くことができ、貴重な情報が得られる。そして、体験談を聞いた後は毎回活発な質疑応答が交わされる。

なお、2020年度以降は本クラスの元受講生がゲストスピーカーとして登壇している。そのため、受講生の置かれている状況や気持ちを十分に理解し、質問にも親身に応じている様子が印象的であった。

2.5.3 受講生の役割

本授業では受講生自身も他の受講生に対して貢献しているといえる。それは、互いに実践練習での発表内容を観察し、ピア評価での助言を行いながら、互いの気づきや学びに繋げているからである。ペアやグループでの実践練習において、自身の研究内容を国籍や専門分野の異なる相手に説明することは非常に難易度の高いタスクであるが、教師フィードバックを受けるだけでなく受講生同士の関わり合いの中で主体的に学習する様

子が随所でうかがえた。

例えば、難解な専門用語や表現を駆使して作成した原稿を丸暗記して話そうとする受講生は、平易な語彙や文型でも、分かりやすく伝えられる手法を他の受講生の発表から学習することができた。あるいは、自分には尋ねられなかった質問に対して他の受講生はどのように答えるのか、そしてそれは適切な回答なのかを教師の反応を確認することで、自身の学びへと還元することができた。こうしたことから、受講生同士の関わりが各々の気づきや学びにとって非常に重要な要素であったと考えられる。

2.6 本授業の特徴

以上をまとめると、本授業は教師とゲストスピーカー、そして受講生が協働で授業を作り上げ、支え、学び合うという特徴がある。

先述したように、情報の提供については教師とゲストスピーカーが連携し、それぞれが担う役割を分けた。すなわち、日本語教師は授業全体をファシリテートしつつ、受験指導や日本語支援を行い、ゲストスピーカーは受講生の身近な目標、いわゆるロールモデルとして、受験情報や助言の提供に大きく貢献しているのである。

また、本授業の重要な要素は、ゲストスピーカーと受講生の交流が活発になるような雰囲気である。遠隔授業では対面授業よりも受講生が発話や発問を躊躇する傾向があるが、ゲストスピーカーの積極的な働きかけにより、受講生が臆せず質問できる雰囲気に変化していった。

さらに、「ここにいる人たちはライバルではなく、仲間。全員が合格できるように皆でベストを尽くそう。」といった声かけを教師から行っていくことで、次第にクラス内にラポールが形成されていった。それにより、受講生間の関心も高まり、大学院合格という共通の目標に向かって、グループで行う実践練習やピア評価が一層活発になったのではないかと考えられる。

3. 教師による観察

本節では、授業中の受講生の様子を、授業を担当した2名の教師の観察に基づいて、講義、実践練習、ピア評価、教師フィードバックの順に述べていく。

3.1 講義

教師は講義の際に大学院受験に関する知識と情報を伝えたが、一方的な説明をするのではなく、講義に質問や問いを多く準備し、受講生に回答させながら進行した。講義の中で受講生は、「大学院受験になぜ面接はあるのか」「大学院合格に必要な能力は何か」「面接官は面接試験で何を測定しているか」「各質問で面接官は何を知りたいか」などの質問

に自身の言葉で回答していた。しかし、身近な友人や先輩大学院生から得た断片的な知識と情報に基づいた回答や主観的な意見による回答も少なくなかった。しかし、様々な受講生からの回答や教師の説明を聞くと、自身の知識と情報が不十分であることに気づき始めた。そして、質問の意図を確認する質問、自身の知識や情報の正確さを確認する質問、講義をより深く理解するための質問などが出るようになってきた。

一方、ゲストスピーカーの講義の回では、受講生は熱心に話を聞き、質疑応答の際には、毎学期活発な意見交換が行われた。また、ゲストスピーカーへの質問も、日本語力向上の練習方法、研究計画書の作成方法、筆記試験に向けた専門知識の準備、面接当日の服装、面接の練習方法など多岐に渡り、大学院入試に向けた実践的な知識と情報をより多く吸収しようとする積極的な姿勢が見られた。

3.2 実践練習

実践練習は、教師が具体的な練習の手順と内容を指示した後に、ブレイクアウトルームに分かれて開始した。教師2名は各ブレイクアウトルームを巡回し、受講生の練習の様子を観察した。以下では、初回から4回目までの受講生の様子を順に述べる。

初回は初対面の受講生と日本語で話すことに緊張し、声も小さく自信もないように見受けられた。また、自身で研究計画書を書いたものの、日本語で話す練習は乏しく、日本語で話すことに大きな不安を感じているようだった。そのため、語彙、文法、発音などの不正確さが目立ち、言い直しや沈黙などの流暢さも欠けていた。

2回目は事前に研究計画書の内容（研究テーマ、テーマの選択理由、研究計画、研究目的、研究方法、期待される成果）を簡潔に要約して文字化した原稿を準備後に練習した結果、内容面も向上し、徐々に声も大きくなった。しかし、単に原稿を音読したため、難解な専門用語が面接官役の受講生に十分に理解されない状態で話し続ける様子が散見された。また、この段階では、まだ面接官役の受講生の理解度を確認しつつ質問に回答する余裕がなかったように見受けられた。

3回目になると、教師フィードバックで得た知識や受講生自身の様々な気づきが実践練習に反映されていた。具体的には、一文の長さが短くなり、漢語が和語に変わり、難解な専門用語の説明では、定義が追加され、平易な日本語で言い換えられるなどの工夫が見られた。その結果、これらの聞き手に対する配慮が増し、練習相手の理解も格段に促進された。また、面接官役の反応を見ながら話す速度を柔軟に変えていた。さらに、表情も豊かになり、相槌も自然に打てるようになっていった。

4回目の教師との模擬面接では、3回目までの実践練習で身に着けたことを活用し、いずれの受講生も自身の研究計画書について、簡潔かつ明解に回答できるようになっていた。また、面接官役の教師からの研究計画書に対するさらなる質問に対して、質問内

容を正確に理解した上で、過不足なく回答していた。

3.3 ピア評価

ピア評価を行う際に、教師から面接官役の受講生には、「上手にできた点」と「さらによくするための助言」の双方を受験生役の受講生にコメントするように指示した。また、コメントをする際には、否定的な日本語表現は使用しないように併せて伝えた。

初回のピア評価では、声の大きさ、発音、文法など日本語表現の正確さや流暢さに関するものや、表情やマナーなどに関するコメントが多く見られた。そして、「上手にできた点」に関するコメントが多く、「さらによくするための助言」に関する言及は、受験生役の受講生に遠慮し、あまり多く見られなかった。

しかし、2回目と3回目になると、日本語表現の正確さに関するコメントに加えて、一文の長さや専門用語の言い換えに関する助言も見られるようになった。さらに、研究内容、研究方法、期待される成果などに関する助言や具体的な提案なども徐々に受講生から出るようになっていった。

3.4 教師フィードバック

教師フィードバックは、その日の講義で扱った知識や情報が実践練習でどの程度達成されたかを確認し、受講生に気づきを促すことを目的として実施した。

毎回の実践練習で教師がブレイクアウトルームを巡回すると、いずれの受講生も熱心に練習に取り組んでいたが、学習目標が十分に達成されていないようだった。何がどの程度不足しているかが具体的に認識できていない受講生や、不足点は認識できていても、どのように改善すれば良いかが自身では見つけられない受講生もいた。具体的な問題点としては、質問に詳細に回答するあまり、話が長くなりすぎたり、一方的に話し続けたりする傾向が見られた。そこで、教師フィードバックの際には、具体的な改善案として、各質問に対しては、無理に詳細に回答せず、簡潔に要点を述べることや、常に面接官の反応を確認しつつ回答することなどが大切であると示した。

また、実践練習で受講生に共通して見られた課題は、実践練習終了時や授業の最後にまとめとして取り上げた。その際、当日の講義で扱った内容を再提示し、できている点とできていない点を具体的に説明し、さらに改善するための方法を提示した。これらのフィードバックの結果、受講生は次回の実践練習で自身が面接官役になった際に、教師フィードバックで得た知識、改善案を積極的に受験生役の受講生に伝えている姿を頻繁に見るようになった。

4. 自己評価から見えること

本節では、毎回の授業の最後に記述する受講生の自己評価から受講生の学びについて、講義、実践練習、ピア評価、教師フィードバックの順に述べていく。なお、受講生のコメントは読みやすさを考慮し、原文の日本語表現を適宜修正して記載する。

4.1 講義

教師の講義、ゲストスピーカーの体験談に関しては、以下のコメントが挙げられた。

- ・面接の流れ、面接の日本語表現がいろいろと勉強になった (ID.3)
- ・ゲストスピーカーの（受験に関する）詳細な説明がとても勉強になった (ID.4)
- ・面接での質問に対して、どのように準備したらよいかを（ゲストスピーカーから）学ぶことができた (ID.5)
- ・大学院の志望理由を述べるときは大学をただ褒めるのではなく、自分にとって魅力的な理由を具体的に説明することが大事だと分かった (ID.9)

第1回の授業の講義では、なぜ面接試験があるのか、指導教官は面接で何を知りたいのかを受講生に尋ねるところから始まるが、「そんなこと考えたこともない」といった様子の受講生は少なくない。このような面接の意義や目的、そして面接の内容や流れなどに関する情報は、指導教官に教わる機会や場がないので、非常に有意義だという声が多かった。

一方、大学院受験に関する講義が有益であるという評価が多いのに対し、コース最終回で行った奨学金・就職の面接については、あまり為にならなかった、という声が聞かれた。

- ・（就職の面接の講義について）今は大学院の入試に集中しているので、就職活動については考えたことがなく、関心もなかったため、今日の講義はあまり役に立たなかった (ID.3)

受験を間近に控えた受講生にとっては、さらに先にある就職活動について考える余裕がなかった可能性がある。この点については、受講生のニーズを踏まえて、今後授業内容を再考することが課題となるであろう。

4.2 実践練習

毎回2～3名のグループで行っている実践練習および第4回で行う模擬面接の授業活動については以下のコメントが挙げられた。

- ・実践練習は非常に役に立った。自分が言いたいことを全部言うよりも、相手にとって分かりやすいかどうかを考えるからである (ID.3)
- ・他の学生の模擬面接で、いろいろな質問、答え方が聞けて、大変勉強になった (ID.9)

- ・クラスメートの良さを学ぶことで、自分の問題にもすぐ気づくことができた (ID.5)
- ・良いテンポとスピーチの長さが分かってきた。自分の間違いだけでなく、他の人の発表のおかげでとても勉強になった。どのくらい詳しく説明をすればいいのか学んだ (ID.4)

これらのコメントから、実践練習そのものが自らに役立つだけでなく、他者の発表からも様々なことを学んでいる様子がうかがえる。さらに、実践練習を繰り返し行うことで、回を追うごとに発表の向上も実感できている。一方で、次のようなコメントもあった。

- ・実践練習の時間が少なく全部発表できなかった。3人のグループだったので、結構時間がかかった (ID.1)
- ・実践練習の時、毎回相手が変わるほうが効果的だと思う (ID.3)

これらの評価から、実践練習では受講生が平等に発話できるよう十分な時間の確保と時間管理に留意し、都度相手を変えることも有効な練習に必要であると考えられる。

4.3 ピア評価

実践練習および模擬面接後のピア評価に関するコメントを以下に挙げる。

- ・毎回違う学生の話の話を聞くと、短所や長所も分かりやすく、自分が話す内容について改めて考えさせられた (ID.3)
- ・色々なクラスメートと話し合うのはとても役に立つ。さまざまな助言をもらうのは自分の学習の助けになる (ID.5)
- ・今回の授業では面接でのテクニックを学んだだけでなく、優秀なクラスメートと知り合い、交流したことで自分の勉強方法を改善し、緊張を緩和できた。先生方のアドバイスとクラスメートとの交流は私の勉強にとっても役立った (ID.5)

これらのコメントから、様々な専門領域の受講生とのコミュニケーションが自らの学びや気づきに繋がったと感じていることが分かる。

4.4 教師フィードバック

最後に、教師フィードバックについてのコメントを挙げる。

- ・研究テーマをもっと絞ったほうが良いという助言が役に立った (ID.3)
- ・聞いただけでは理解しにくい専門用語と漢語を少なくし、分かりやすい日本語で話すことの大切さを教わった (ID.9)
- ・(時間が足りず) 先生からのコメントが聞けなくて残念だった (ID.1)
- ・先生のアドバイスがよく分からなかったなので、できれば(コメント欄に)書いてもらいたい (ID.6)

以上のように、教師フィードバックは有効な助言として受け止められていた。講義で

伝えることができるのは全体に共通するポイントのみであり、受講生個別の課題に対しては、発表を見ながら細かく教師フィードバックを行う必要がある。可能な限り一人ひとりに対応した教師フィードバックを行うよう配慮していたが、不十分なこともあった。受講生を失望させることがないように十分な時間の確保と時間配分に留意し、授業内の口頭によるコメントは、受講生の理解を確認しながら Zoom のチャット機能を利用した文字による伝達も考えていく必要があるだろう。

5. 本実践から見えたこと

本節では、3の「教師による観察」、4の「自己評価から見えること」の解釈から、本実践の意義についてまとめる。まず、コースを通して受講生がどのように変容していったのかを述べ、次に、それらの変容がどのような活動や刺激によって起こったのかを考察する。

5.1 受講生の変容

受講生の変容としてまず挙げられるのは、授業の回数を重ねるにつれ、受講生が自らの学びに対して積極的になっていったという点である。授業初回、このクラスでは何を教えてもらえるのかと、比較的受け身な姿勢で授業に参加する受講生は少なくない。ところが、本クラスでは、面接の受け答えの原稿を各自が作成し、実践練習を繰り返し、他の受講生の発表に対して助言も与えねばならない。よって、必然的に授業や課題に主体的に取り組まざるを得なくなる。このようにして当初は消極的だった受講生も徐々に自分の研究テーマや研究計画、大学院進学後の生活について真剣に考えるようになっていった。また、初めのころは自信がなく、声も小さかった受講生が教師フィードバックを実践練習に活かし、授業が進む中で自身の発表を改善し、徐々に自信を付けていく様子も見られた。

もう一つの変容としては、授業の回数を重ね受講生がクラスに慣れてくると、他の受講生の研究内容にも関心を示し、実践練習でより具体的な質問や有益な助言をしようとする場面が増えてきたことである。2.6で述べたように、クラス内にラポールが形成され始めると、自身とは異なる領域の研究についても理解しようと努め、コミュニケーションを駆使して相手に寄与しようとする姿勢が見られた。このような受講生同士の関わり合いの中で、他者と自らを比較、分析する機会が生じ、自身の発表を俯瞰的に把握できるようになっていったことも挙げられる。

5.2 受講生が受けた刺激

前述した受講生の変容を誘発させた要因として、ゲストスピーカーというロールモデ

ルの提示と彼らからの助言、教師フィードバック、さらに受講生同士の関わりが挙げられる。以下では、これらの3つの刺激を説明する。

ゲストスピーカーの貢献については、2.5.2および2.6で述べたとおりであるが、彼らが受講生に与えた影響は小さくない。特に、現在のコロナ禍において教員や先輩との接触が極端に減り、多くの受験生が相談できる当てがなく孤立した状態にある中で、気軽に質問し、不安を打ち明けられることのできる貴重な機会であったといえる。こうした場を設けることは受験準備として有効であるだけでなく、受講生の抱える様々な不安を軽減し、心の安定にも作用したのではないだろうか。

次に、教師のフィードバックの有用性は、毎回のmanabaのアンケート欄の回答からうかがえた。教師フィードバックは自身の研究内容や発表を改善させるのに有効なだけでなく、ピア評価を行う際にも活用することができた。教師フィードバックから得た知識と情報で、他者の発表に対する改善案を積極的に提示できるようになるなどの学習効果もあった。また、授業内外での頻回な教師フィードバックが受講生の学習意欲の維持に貢献したことも学期終了時のmanabaのアンケート欄の回答から明らかになった。

最後に、もう一つの刺激として、受講生同士の関わりが挙げられる。実践練習では、様々な組み合わせのペアやグループで繰り返し口述練習を行い、そのパフォーマンスに対してピア評価を実施した。これらの活動が受講生の意識の向上に大きく作用したようであった。臆せず発言できる授業環境を整備し、前向きで明るい雰囲気の中で、受講生同士が互いに意見を述べられるように、良い人間関係を築けたことが効果的な授業の鍵になったと考える。

6. まとめと今後の課題

手探りの中で始まった「キャリア支援日本語コース」の「大学院進学のための日本語（面接）」クラスは試行錯誤を重ねてきたが、「教師」、「ゲストスピーカー」および「受講生」という人的リソースを適切に活用することで、大学院の面接試験に向けた準備の支援を行うことができた。そして、本授業を通して受講生の大学院受験に対する意識や進学意欲の向上が図れたことも大きな成果だと考える。本実践では、受験対策という枠を超え、将来遭遇する可能性のある様々な場面で必要な知識や情報を理解し、さらに対応可能な技術を身に付けられるよう授業内容を展開してきたが、2021年春学期にゲストスピーカーとして招いた前年度の本授業受講生2名の講義中の発言からは、本講義が大学院受験合格の一助となったことがうかがえる。

今後の課題としては、関係者間との連携の強化が挙げられる。

まず、大学院研究科教員との連携強化について述べる。2.2で述べたように筑波大学大学院には多様な研究科と専攻があるが、大学院入試面接でも所要時間、試験官の人数、

質問の数や内容などは各専攻によって異なっている。現時点で日本語教師が保有する知識では受験に必要な量と質の情報が蓄積されていないため、大学院各研究科の教員より最新の受験に関する情報を入手し、様々な専門分野の受講生に対応可能な情報を蓄積し、適切な指導が可能になる体制を整えることが必要であろう。

また、本授業では現在ゲストスピーカーを過去の受講生であり現役の大学院生を中心に依頼しているが、今後は可能であれば、大学院研究科の教員にもゲストスピーカーを依頼することも検討中である。大学院の教員の視点で面接試験に求めるものや大学院生に期待する資質や能力などの講義をしてもらうことで、受講生の進学意識や学習意欲がさらに向上することが期待される。

もう一つは、CEGLOCの「キャリア支援日本語コース」の他科目の授業担当教員や日本語プログラムコーディネーターと本実践の知見を共有することである。CEGLOCの「キャリア支援日本語コース」には、本授業以外にも、就職支援に向けた日本語のコミュニケーション能力を向上させるクラスや、各種日本語の資格試験に合格するためのクラスなどが設置されている。人的リソースを活用した本授業が「キャリア支援日本語コース」の各科目の授業設計やクラス運営の一助になれば幸いである。

参考文献

- 木戸光子・関崎博紀・Ruth Vanbaelen (2020)「大学・大学院留学生対象のキャリア支援日本語コースの開講の経緯と課題」第26回大学研究フォーラム予稿集 www.highedu.kyoto-u.ac.jp/forum/kanri/forum/pdf/20200423124559.pdf
- 近藤晶子・静谷麻美・北條幸興・弓田順道・伊集院郁子・小池圭美・水落いづみ・高木裕子 (2005)「平成16年度大学院教材作成報告」『独立行政法人日本学生支援機構日本語教育センター紀要』1号 123-132
- 近藤晶子・静谷麻美・北條幸興・弓田順道・伊集院郁子・小池圭美・水落いづみ・高木裕子 (2006)「平成17年度『大学院へ進学するために』教材作成報告」『独立行政法人日本学生支援機構日本語教育センター紀要』2号 138-148
- 静谷麻美 (2008)「大学院晋が言うクラスにおける研究計画書およびプレゼンテーションを目的とした授業」『独立行政法人日本学生支援機構日本語教育センター紀要』4号 13-30
- 弓田順道 (2009)「大学院教材開発委員会活動報告 平成20年度大学院進学説明会特別セッション 大学院合格教材「口頭試験の受け方」についての報告」『独立行政法人日本学生支援機構日本語教育センター紀要』8号 194-201